

友人との接触頻度別にみた大学生の友人関係機能¹⁾

丹野 宏 昭

筑波大学大学院人間総合科学研究科

従来の友人関係研究では、友人関係が個人の内的適応を促進する機能について繰り返し検討してきた(例えば中野・永江, 1996; 嶋, 1992; 菅沼・古城・松崎・上野・山本・田中, 1996; 高倉・新屋・平良, 1995; 鈴木, 2002)。丹野・松井(2006)は、友人関係機能に関する研究を概観し、従来の研究における問題点として、以下の2点を挙げている。第1に、「ふだんからよく会う友人関係(High Interaction: HI友人関係)」の機能しか検討されず、「めったに会えないが親密な友人関係(Low Interaction: LI友人関係)」の機能については全く検討されていない点である。第2に、1つの研究の中で特定の友人関係機能のみに着目した研究が多く(例えばソーシャル・サポート研究)、網羅的に友人関係機能を把握した研究は少ない点である。

以上の問題点をふまえ、丹野・松井(2006)は、広義の内的適応に影響を与えるさまざまな友人関係の側面を「友人関係機能成分」と定義し、大学生から得られた自由記述の分類からHI友人関係とLI友人関係の友人関係機能成分を網羅的にとらえた。本研究は、丹野・松井(2006)の結果をふまえ、大学生のHI友人関係とLI友人関係の機能成分を具体的に比較することで、各友人関係の機能の特徴について検討することを目的とする。

方 法

調査対象 神奈川県・茨城県・新潟県の大学に通う大学生330名を調査対象とした。全調査対象のうち、回答が全体の項目の半分以下であった調査対象および明らかに回答に虚偽があると判断された24名の調査対象を除き²⁾、306名(男性166名、女性140名、平均年齢18.8歳)を有効回答者とした。

調査内容 教示文が異なる2種類の質問紙を作成し、調査対象にはランダムにどちらか1種類を配布した。調査対象には、以下の教示文により、具体的に友人1名の想定を

求めた。教示文は、「ふだんから会う機会の多い、親しい同性の友人(以下HI友人)として想定される人物はいますか」と、「会う機会は年に数回以下だが、親しい同性の友人(以下LI友人)として想定される人物はいますか」の2種類であった。想定される人物が「いる」か「いない」かの2件法で回答を求めた。「いない」と回答した回答者には、最も仲の良い同性の友人を想定し、それ以降の項目について回答するよう求めた(「いない」と回答した回答者については分析から除外している)。次に、想定されたHI友人・LI友人と「会う頻度」について、「想定した友人と、どれくらいの頻度で会っていますか(例 週に3回、年に1回程度)」という教示により、会う頻度を尋ねた。

友人関係機能尺度 丹野・松井(2006)の結果をもとに友人関係機能尺度を作成した。丹野・松井(2006)で作成された友人関係機能成分カテゴリーの12側面³⁾(「安心」「気楽さ」「相互理解」「重要性」「娯楽性」「尊敬・信頼」「類似性」「関係継続展望」「情緒的結びつき」「相談・自己開示」「支援性」「ライバル性」)に、友人関係の構造や役割を調査した研究を参考にして、「肯定・受容(Davis & Todd, 1985; 山本, 1986)」、「学習・自己向上(和田, 1993)」、「人生の重要な意味(藤田, 2000)」、「活動の共有(和田, 1993)」の4側面を加え、友人関係機能尺度の下位尺度とした。下位尺度はそれぞれ5~7項目ずつ、全体で98項目16側面からなる友人関係機能尺度を独自に作成した。各項目について、「1.あてはまらない」から「5.あてはまる」までの5件法で回答を求めた。

結果と考察

想定された友人の有無 全有効回答者のうち、「ふだんから会う機会の多い、親しい同性の友人(HI友人)」がいると回答したのは145名中138名(95.2%:男性60名、女性78名)、「会う機会は年に数回以下だが、親しい同性の友人(LI友人)」がいると回答したのは161名中141名(87.6%:男性86名、女性55名)であった。この結果から大学生はHI

1) 本論文は、日本社会心理学会第46回大会(2005)で発表されたデータを再分析し、発表論文の加筆・修正を行ったものである。論文執筆にあたり、ご指導いただいた松井 豊教授(筑波大学人間総合科学研究科)に心より感謝申し上げます。
2) 本研究では、「全項目同じ選択肢を選んでいたもの」などを虚偽の回答と判断した。

3) 「家族性」の側面は、丹野・松井(2006)での回答数が少なく、また、友人関係の特徴を示したものではないと考えられる。以上より、友人関係機能成分として妥当ではないと判断し、削除した。

Table 1 友人関係機能尺度の下位尺度の代表項目

側面	代表項目	負荷量	寄与率	α 係数	項目数
安心	彼(女)との関係は、とても安心する	.862	58.8%	.848	6
気楽さ	彼(女)と一緒にいると、なんとなく楽だ	.845	54.2%	.779	6
相互理解	彼(女)の性格は、よく理解している	.839	64.3%	.858	5
重要性	彼(女)は、なくてはならない友人である	.766	50.6%	.743	5
娯楽性	彼(女)と一緒にいると、楽しい	.827	53.0%	.801	6
尊敬・信頼	彼(女)を、尊敬している	.741	58.9%	.776	7
類似性	彼(女)とは、考え方が似ている	.858	53.0%	.818	6
関係継続展望	彼(女)は、生涯の友となると思う	.776	66.3%	.889	6
情緒的結びつき	彼(女)は、いわゆる「心の友」である	.849	53.8%	.824	6
相談・自己開示	彼(女)は、よい相談相手である	.808	59.2%	.826	5
支援性	彼(女)は、ふだんから私を助けてくれる	.783	52.6%	.889	6
ライバル性	彼(女)は、いわゆる「ライバル」のような存在である	.704	54.5%	.645	6
肯定・受容	彼(女)は、自分の存在を受け入れてくれる	.791	52.4%	.843	7
学習・自己向上	彼(女)との関係は、自分を精神的に成長させてくれる	.831	50.7%	.832	7
人生の重要な意味	彼(女)は、自分の人生を語る上で欠かせない存在である	.813	54.5%	.823	6
活動の共有	彼(女)とは、一緒によく遊ぶ	.854	58.0%	.701	5

友人とLI友人いずれとも関係を有していることが明らかになった。

接触頻度による分類 本研究で友人と会う頻度を集計した結果、HI友人として想定された友人では9割以上が「会う頻度は月に2回以上」であり、LI友人として想定された友人では9割以上が「会う頻度は月に1回以下」であった。したがってHI友人が「いる」と回答した回答者のうち、想定した友人と会う頻度が「月に2回以上」であった回答者を「HI友人群」と定義し、LI友人が「いる」と回答した回答者のうち、想定した友人と会う頻度が「月に1回以下」と回答した人物を「LI友人群」と操作的に定義した。その結果、HI友人群は125名(男性51名、女性74名)、LI友人群は125名(男性82名、女性43名)となった。以下の分析はHI友人群とLI友人群に限定した。

尺度構成 友人関係機能尺度の各下位尺度の1次元性を確認するために、下位尺度ごとに主成分分析を行った⁴⁾。主成分負荷量が.40未満の項目がみられた尺度は、その項目を削除し、再度主成分分析を行った。最終的に全体で3項目

4) 本研究の友人関係機能尺度について因子分析を行ったところ、第1因子への寄与が極めて高いという結果が得られた。しかし、丹野・松井(2006)より、友人関係が内的適応に果たす機能は一樣ではないため、友人関係と内的適応との関連を網羅的に検討する上で、友人関係機能成分を分類する必要があると考えられる。そこで本研究では、友人関係の先行研究を概観し、友人関係機能成分を分類した丹野・松井(2006)の結果をもとに尺度を作成し、下位尺度ごとに主成分分析を行い、各尺度の1次元性を確認した。また、本研究では、HI友人関係の得点とLI友人関係の得点を同時に用いて主成分分析を行った。なお、HI友人関係とLI友人関係の得点をそれぞれ別々に用いて主成分分析を行ったところ、どちらもまとめて主成分分析を行った場合と同様の結果が得られた。

が削除されたが⁵⁾、いずれの尺度も1次元性が確認された。各側面の主成分負荷量の最も高い1項目についてTable 1に示す。

各群の友人関係機能尺度得点の比較 友人関係機能尺度の各下位尺度の得点を従属変数、接触頻度の高低と性別を独立変数とした2元配置分散分析を行った。各群の平均をTable 2に示す。結果、「支援性」「活動の共有」はHI友人群のほうがLI友人群よりも有意に高い値を示し(いずれも $p<.05$)、「安心」「相互理解」「関係継続展望」はLI友人群のほうがHI友人群よりも有意に高い値を示した(いずれも $p<.05$)。さらに、「安心」「気楽さ」「相互理解」「重要性」「尊敬・信頼」「関係継続展望」「情緒的結びつき」「相談・自己開示」「支援性」「肯定・受容」「学習・自己向上」「人生の重要な意味」は女性のほうが男性よりも有意に高い値を示した(いずれも $p<.05$)。全ての尺度において、接触頻度の高低と性別との有意な交互作用はみられなかった。

HI友人関係とLI友人関係を比較すると、友人関係機能尺度の得点から、HI友人関係は、LI友人関係よりも、日常で得られる相手からの支援が多く、一緒に何らかの活動をする頻度が高いことが明らかとなった。道具的サポートなどの支援の多くは、接触をともなって交換されるためであると考えられる。他方、LI友人関係はHI友人関係よりも安心感が強く、お互いのことを理解しあい、関係が長く持続する関係と捉えられていた。LI友人関係は、毎日のように顔を合わせるHI友人関係とは異なり、相手との衝突や関係の悪化が生じる恐れが弱く、安心感の強い関係が長く続くと思われているためであると考えられる。

5) 削除された項目は、「彼(女)は、趣味や娯楽の仲間である」「彼(女)は、他の人からも評価がよい」「彼(女)と、一緒に仕事することが多い」である。

Table 2 各群の友人関係機能尺度の平均値と標準偏差

		安心	気楽さ	相互理解	重要性	娯楽性	尊敬・信頼	類似性	継続展望
HI 群	男性	3.55	3.76	3.58	3.65	4.10	3.45	3.43	4.02
	N=51	(0.72)	(0.55)	(0.83)	(0.71)	(0.66)	(0.73)	(0.76)	(0.73)
LI 群	女性	3.90	4.02	3.72	4.05	4.23	3.89	3.41	4.21
	N=74	(0.66)	(0.44)	(0.88)	(0.70)	(0.59)	(0.53)	(0.76)	(0.69)
HI 群	男性	3.66	3.82	3.76	3.60	4.18	3.54	3.32	4.25
	N=82	(0.63)	(0.48)	(0.70)	(0.61)	(0.61)	(0.64)	(0.77)	(0.60)
LI 群	女性	4.02	4.10	4.14	3.87	4.34	3.86	3.46	4.57
	N=43	(0.55)	(0.45)	(0.76)	(0.72)	(0.61)	(0.67)	(0.91)	(0.48)

		情緒	相談・開示	支援性	ライバル性	肯定・受容	学習	人生	活動共有
HI 群	男性	3.43	3.80	3.77	3.61	3.74	3.64	3.61	3.84
	N=51	(0.77)	(0.84)	(0.78)	(0.71)	(0.68)	(0.71)	(0.83)	(0.78)
LI 群	女性	3.76	4.11	4.19	3.50	4.19	3.99	3.93	3.99
	N=74	(0.76)	(0.79)	(0.59)	(0.58)	(0.53)	(0.62)	(0.66)	(0.70)
HI 群	男性	3.50	3.95	3.63	3.56	3.84	3.67	3.57	3.19
	N=82	(0.60)	(0.67)	(0.58)	(0.61)	(0.58)	(0.62)	(0.69)	(1.01)
LI 群	女性	3.86	4.14	3.94	3.60	4.19	4.00	3.90	3.06
	N=43	(0.84)	(0.80)	(0.77)	(0.64)	(0.53)	(0.73)	(0.80)	(1.10)

注. 括弧内は標準偏差

また、多くの側面で女性の得点のほうが男性の得点よりも高かった。この結果から、女性の友人関係は男性よりも多様な友人関係機能成分を有し、女性の友人関係は多くの機能を果たしていることが明らかになった。女性のほうが男性よりも、友人関係のいくつかの側面が活発であるという本研究の示唆は、友人関係の性差を検討している先行研究（例えば和田，1993）とも整合していると考えられる。

本研究から、大学生の友人関係には、接触をとまわなくとも個人の内的適応に影響を及ぼしうる関係が存在していると示唆された。対人関係では、頻繁な関わり合いだけが重要なのではなく、対人関係が存在していること自体もまた、人間の適応に影響を及ぼしていると考えられる。

今後の課題 本研究では、友人関係機能の接触頻度と性別による差を検討するために、友人関係機能尺度の得点の比較を行った。その結果、いくつかの側面で接触頻度や性別の主効果がみられた。しかし、有意差がみられたいくつかの側面では平均値の差は小さかった。今後、適応指標などとの関連を調べることで、より詳細に友人関係機能の接触頻度の差や性差について検討していく必要があると考えられる。

また、本研究の友人関係機能尺度は、先行研究のレビューと自由記述によって友人関係機能を分類した丹野・松井（2006）をもとに作成された。この友人関係機能の分類の有効性を確認するためには、本尺度と内的適応との関連を検討する必要があると考えられる。

types, paradigm cases, and relationship description, In S. W. Duck & D. Palman (Eds.), *Understanding personal relationships*. London: SAGE. pp. 34–35.

藤田綾子（2000）. 高齢者と適応 ナカニシヤ出版

中野綾子・永江誠司（1996）. 青年期における孤独感及び孤独感の受容と精神的健康 福岡教育大学紀要, **45**, 309–321.

嶋 信宏（1992）. 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, **7**, 45–53.

菅沼 崇・古城和敬・松崎 学・上野徳美・山本義史・田中宏二（1996）. 友人のサポート供与がストレス反応に及ぼす効果 実験社会心理学研究, **36**, 32–41.

鈴木有美（2002）. 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康——共感性およびストレス対処との関連—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）, **49**, 145–155.

高倉 実・新屋信雄・平良一彦（1995）. 大学生の Quality of Life と精神的健康について——生活満足度尺度の作成—— 学校保健研究, **37**, 414–422.

丹野宏昭・松井 豊（2006）. 大学生における友人関係機能の探索的検討 筑波大学心理学研究, **32**, 21–30.

和田 実（1993）. 同性友人関係：その性および性別タイプによる差異 社会心理学研究, **8**, 67–75.

山本真理子（1986）. 友情の構造 東京都立大学人文学報, 183号, 77–102.

引用文献

Davis, K. E., & Todd, M. (1985). Assessing friendship: Proto-

— 2006.6.13 受稿, 2007.2.28 受理—

Interaction Frequency and Functions of Friendship for Undergraduates

Hiroaki TANNO

Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 16, No. 1, 110–113

The purpose of this study was to compare a high-interaction (HI) friend and a low-interaction (LI) friend. Undergraduates, 166 men and 140 women, 306 in total, were asked to imagine a HI or LI friend, and complete a 98-item questionnaire concerning functions of the friendship. Results indicated that most undergraduates had both HI and LI friends. And “support” and “shared activity” characterized HI friendship, whereas “ease of mind,” “mutual understanding,” and “expectation of long-term tie” did LI friendship.

Key words: function of friendship, high-interaction friendship, low-interaction friendship